

岐路に立つ — 山室軍平 —

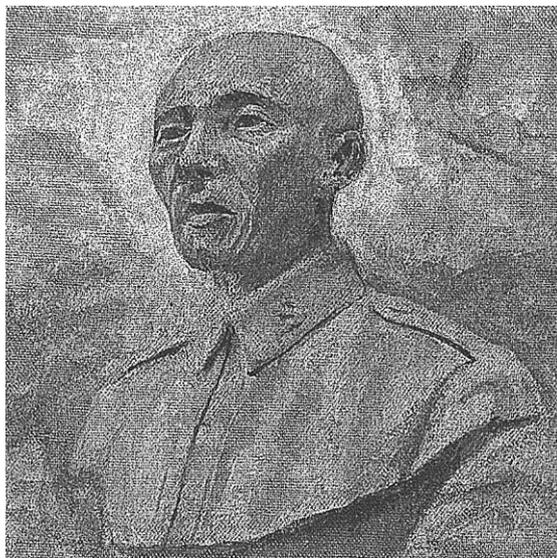
新見市（旧哲多町）の本郷小学校の校庭の片隅に、「山室軍平」の像が立っている。

軍平は、明治五年にこの地の貧しい農家の八番目の子どもとして生まれた。軍平が生まれた当時の日本は、公共の福祉対策が十分でなく、食べるものさえ満足に得られず、貧しい生活のまま死んでいく人も珍しくなかった。

軍平はそんな社会的に弱い立場の人々を救うために、お金や食べ物を提供したり、結核療養所や貧しい人のための病院を開設したり、不況対策として労働者紹介所を開設したりするなど、数々の社会福祉事業に取り組んだ。

そんな彼の生き方に大きな影響を与えたのは、母、ともの存在だった。ともはとても優しい人で、貧しい人が訪ねてくると、自分の食べ物が無くなっても、食べ物を与えることがしばしばあった。ともその後ろ姿を見て育った軍平は、人を思いやる優しさを自然に身に付けていった。

また、軍平は幼いころから多くの書物を読んで育った。向学心が強く、いつかは学問で身を立てたいと考えていた。その思いが募って、十四歳の時に上京。活版所の職工として働きながら、英語や政治・経済などを独学で学んだ。勉学に励む中で自分の将来を考えたとき、ともの影響もあつてか、世の中の弱い立場の人を救いたいという気持ちが強くなっていった。



岐路：わかれ道。

活版所：活字を組んで、印刷するところ。

そんなとき、ある人から「単に知識を得ることに重きを置かず、人徳を磨き、知識や人徳をもって人のために尽くせる人物を作りたい」と考えた新島襄にいしまじょうの教えや人格のすばらしさなどのうわさを聞き、ぜひ教えを請こいたいと考えるようになった。そして、学資のめどもたたないままに、新島襄の大学へ進学を決意した。

大学に入学してからは、学問のおもしろさや深さにひかれ、尊敬する先生や先輩たちにも恵まれ、心豊かな日々を送っていた。だから、経済的な困難も乗り越えることができた。しかし、尊敬する新島先生が亡くなって、大学では、「神・宇宙・人生・永遠」など、抽象的なことばかりが論じられるようになっていった。軍平もたくさんの本を読み、数多くの講演を聞いて勉強はげに励んだ。しかし、学べば学ぶほど、抽象的なことばかり論じて、それを現実の生活の中で生かそうとしない学問のあり方に疑問を感じ、学問に対する興味もだんだん薄うすれていくのだった。

軍平は迷っていた。そして、心身ともに疲れ果てていた。

（大学をやめるべきか。それともこのまま卒業まで続けるべきか。）

学資はもとより、その日の食事代もなかった。十日間以上の断食は、身体にはかなりこたえたが、何度も同じような苦難を乗り越えてきた。それ以上に軍平を苦しめているものがあつた。それは、学問に対する迷いであり、自分の生活に目的を見いだせなくなった不安だった。

その時、脳裏によき理解者であり、経済的な援助をしてくれた吉田の優しい顔が浮うかんできた。

（今大学をやめたら、自分の食費を切り詰つめて、わたしの学資に充あててくださり、励ましの言葉を幾度いくどとなくかけてくださった吉田さんに何と言えはいいのだろう。）

また、「岡山孤児院のために力を貸してほしい。」と言った石井十次じゅうじの言葉が思い出された。いずれは社会的・経

人徳：他人の苦しみやつらさをのぞき、喜びや楽しみを与えようとする徳。

新島襄

（一八四三〜九〇）

アマースト大学を卒業。岩倉使節団に随ま行し欧米の教育施設を視察。帰国後、京都に同志社英学校（後の同志社大学）を創立。キリスト教精神に基づく教育に専念した。

学資：学問を修めるのに必要な費用。学費。

脳裏：頭の中。心の中。

吉田：吉田清太郎。軍平の恩人の一人。同志社大学の先輩。

済的に恵まれない人のために働きたいと考えていた軍平にとって、一つの模範であり、大きな刺激になっていたのが十次であり、十次の開いた岡山孤児院だった。十次は自らの私財をすべてつぎ込み、孤児を救うための施設を建てたのだった。彼の孤児に対する深い愛情は、彼の生活のすべてに表れていた。軍平は以前から、大学で寄付を集め、石井のもとに送っていた。

ある時、岐阜や愛知を中心に大地震が起こり、七千名以上の人々の命が奪われ、十四万戸以上の家屋が失われた。学生だった軍平は、いても立ってもいられなくなった。そして、自らの考えで、孤児の救済のために、被災地のほとんどの役場に行つて、岡山孤児院で孤児をお世話できることを知らせて歩いた。被災地の子どもたちの泣き叫ぶ声や哀れにやせ細った姿が、軍平の行動力を一層高めた。十次は軍平の行動に感謝し、その行動力に影響を受け、自ら被災地に出向き、孤児救済に取りかかった。軍平は、十次と知り合い、活動に協力できたことにより、十次の生き方に深い共感を覚えたのだった。軍平の心の中は、すぐにでも貧しい人や恵まれない人のために働きたいという気持ちでいっぱいになっていた。

軍平は、迷った末に、五年間学び、卒業を目の前にした大学を去った。

それから数年後の十二月、雪がちらつく東京の街頭で、道行く人々に何度も何度もこう呼びかけている軍平の姿があった。

「もうすぐお正月がきます。しかし今、食べる物はもちろん着る物も、そして、住むところにも困っている人々がたくさんいます。皆さんのご厚意で、そのような人々を救っていただきたいのです。お金でも食べ物でもなんでもけっこうです。どうか皆さん、ご協力ください。」

孤児院：両親に死別するなどして、頼れる人がいなくなった子供を養育する施設。

大地震：濃尾地震のこと。

一八九一年十月二十八日濃尾平野に発生した激震。

なかなか善意の品物は集まらなかったが、軍平は一向にくじける様子もなく、さらに大きな声で呼びかけ続けるのだった。その顔は、明るく力強く自信に満ちていて、迷いはなかった。

そのうち、ある老婦人が餅をかごに入れてくれてから、一人また一人と、お金やパン・果物・おかしなどをかごに入れてくれた。

「ありがとうございます。ありがとうございます。これで、温かい気持ちでお正月を迎えられる人が増えます。ご厚意に感謝します。」

軍平は、かごに集まった物を一つ一つ配るときのことを思うと、うれしくてたまらなかった。雪の舞い落ちる空に、貧しい人々の笑顔が次々と浮かんでくるのだった。

山室軍平略年譜

- | | | | |
|------|--------------------------|------|---------------------|
| 一八七二 | 阿哲郡本郷村に生まれる。 | 一八九九 | 佐藤機恵子と結婚する。 |
| 一八八〇 | 養子となる。(足守の杉本弥太郎宅・軍平の母の弟) | | 妻とともに「平民の福音」を執筆する。 |
| 一八八六 | 築地活版製造所の職工となる。 | 一九〇四 | 第三回救世軍大会へ出席のため渡欧する。 |
| 一八八九 | 同志社大学に入学する。 | 一九〇九 | 慈善鍋の運動を始める。 |
| 一八九二 | 救世軍に入隊する。 | 一九二六 | 児童虐待防止運動を始める。 |
| 一八九四 | 高梁の教会で伝道師として働く。 | 一九四〇 | 三月一三日 没する。 |
| 一八九六 | 日本初の救世士官となる。 | | |

1 主題名 充実した生き方〔A 向上心、個性の伸長〕

2 ねらい

自分の夢や願いを叶えるためにどんな気持ちが大切なのかを考える中で、自己を見つめ、自分の本当にやりたいことは何か考えようとする気持ちの大切さに気づき、将来に向かって自らを向上させようとする態度を養う。

3 主題設定の理由

(1) 内容項目について

本時で取り上げる内容項目は、A 向上心、個性の伸長「自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求すること。」である。

自己を見つめるとは、自己について深く省みることであり、そのなかで一貫した自分の姿や将来像を思い描くことにつながる。これまでや現在の自分、将来こうありたいという自分を静かに見つめ直すことは、自己の向上を願って生きていく上で重要なことである。

第2学年では、自己を見つめることを通して、現在の自分や自分の将来について考え、自らを向上させようとする態度を養っていききたい。

(2) 生徒の実態について

本学級の生徒は授業や学校行事に活発に取り組むことができる。職場体験では、それぞれの事業所で仕事内容に興味を持ち、意欲的に取り組むことができた。その反面、自分の将来についての目標や夢については具体的に考えている生徒は少なく、どのように考えていけばよいのかわからないという生徒も多い。

そこで、自分の将来について夢や目標をもつことや、それに向かって努力し自らを向上させることの価値について考えさせたい。

(3) 教材について

本教材は、社会福祉活動に献身的に取り組んだ山室軍平の、自己の進路を決める際の心の葛藤を描いたものである。自己のあり方を問い続け、妥協することのない軍平の生き方を通して、自己を見つめ、自分の本当にやりたいことは何か、真剣に考えることの大切さに気付かせたい。

4 板書例

<p>心のものさし</p> <p>考えたことがある</p> <p>あまりなかった</p>	<p>めあて</p> <p>自分の夢や願いを叶えるためには</p> <p>どんな気持ちが大切か考えよう</p> <p>岐路に立つ — 山室軍平 —</p> <p>大学を続けるべきか、辞めるべきか悩んでいた軍平の気持ち</p> <p>「続けたい」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 食費を切り詰めてまで援助してくれた吉田さんに申し訳ない。 ・ 勉強したくて入ったのに辞めたくない。 ・ これまで努力してきたことが無駄になる。 <p>「辞めたい」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学で学んだことが、役に立たない。 ・ 学んだことを人のために生かすことができない。 ・ すぐにでも人を助ける仕事をしたい。 <p>卒業を目の前にして大学を辞めた軍平の気持ち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今すぐに貧しい人や恵まれない人を助けたい。 ・ 今苦しんでいる人たちを助けるのが自分の使命だ。 ・ 苦しんでいる人たちの心を少しでも幸せにしたい。 ・ 弱い立場の人を救いたいという気持ちを貫きたい。 <p>自分を見つめ本当はやりたいことは何か真剣に考えたこと</p>
--	---

5 他の教育活動との関連

- ・ 総合的な学習の時間（職場体験）

6 学習指導過程

○は基本発問 ◎は中心発問

学習活動	主な発問と生徒の反応	指導上の留意点
1 将来の夢や願いについてのアンケート結果から本時のめあてをつかむ。	○ アンケートの結果を見てどう思ったか。 ・夢のある人が多い。 ・何になりたいか決めている人は意外と少ない。 ・自分は決まっていないので、決まっていない人がいて安心した。	・夢がある生徒とない生徒それぞれが、自己の将来について意識できるようにし、学習課題へとつなげる。
自分の夢や願いを叶えるためにはどんな気持ちが必要なのか考えよう。		
2 教材「岐路に立つ」を読んで話し合う。 (1)印象に残ったところ (2)大学を続けるか辞めるか悩んでいた軍平の気持ち (3)大学を辞めた軍平の気持ち	○ 「岐路に立つ」を読んでどんなところが印象に残ったか。 ・大学を辞めるべきか続けるべきか悩んだところ。 ・迷ったすえに、大学を辞めようと思ったところ。 ・街頭で道行く人々に声をかけているところ。 ◎ 大学を続けるべきか、それとも辞めるべきか悩んでいた軍平は、どんなことを考えていたか。 〔続けたい〕 ・食費を切り詰めてまで援助してくれた吉田さんに申し訳ない。 ・勉強したくて大学に入ったのに辞めたくない。 ・これまで努力してきたことが無駄になる。 〔辞めたい〕 ・大学で学んだことが、役に立たない。 ・学んだことを人のために生かすことができない。 ・すぐにでも人を助ける仕事がしたい。 ○ 軍平が卒業を目の前にして大学を辞めたのは、どんなことを考えたからか。 ・今すぐに貧しい人や恵まれない人を助けたい。 ・今苦しんでいる人たちを助けるのが自分の使命だ。 ・苦しんでいる人たちの心を少しでも幸せにしたい。 ・弱い立場の人を救いたいという気持ちを貫きたい。	・軍平の業績に触れた上で教材を読ませるようにする。 ・印象に残ったところをもとに中心場面に意識が向くようにする。 ・自分の考えをワークシートに書かせてからグループで話し合うようにする。 ・大学を続けるか辞めるかで悩んでいる軍平の多様な気持ちを出し合わせる。
3 これまでの自分を振り返る。	○ これまで、将来の夢や願いについて考えるとき、自分を見つめ本当にやりたいことは何か真剣に考えたことがあるか。 ・考えたことがある ・少しあった ・あまりなかった	・卒業目前の大学を辞める決断をした軍平の気持ちから、自分の本当にやりたいことは何かを考えることの大切さに気付かせる。 ・心の物差しどのあたりに位置付くか考えさせる。 ・理由を話し合うことで、これまでの自分を振り返り、自己のあり方について考えられるようにする。
4 まとめをする。	○ 今日の学習で大切だと思ったことや今の気持ちをワークシートにまとめよう。	
評価の視点	・グループの話し合いを通して多様な考えを出し合い、自分を見つめ、本当に自分がやりたいことは何か考えようとする気持ちの大切さに気付くことができたか。 ・自分を振り返り、将来に向かって自分をしっかり見つめ、努力していこうとする意欲を高めることができたか。	

7 参考資料

(1) 山室軍平（日本救世軍の創設者・社会事業家・宗教家）について

山室軍平は、8歳で母の弟（足守の杉本弥太郎）の養子となる。その後、築地の活版所で働きながら東京専門学校（早稲田大学）とイギリス法律学校（中央大学）の講義録を取り寄せ独学をする。17歳の時、新島襄を慕って京都に赴き、キリスト教青年会の夏期学校を受講し、その年の9月同志社普通学校に首席で入学した。19歳の時、濃尾大震災の孤児救済を努め、石井十次の資金募集を助けた。22歳で苦学した同志社を卒業前に辞めて、高梁教会の伝道師となった。翌年、上京して救世軍を訪ね、入軍した。結婚後には、妻の機恵子とともに『平民の福音』を執筆した。

そして、生涯において様々な救済事業を行っている。主なものに、

- ・ 貧しい人々を救済する歳末の慈善鍋運動
- ・ 結核診療所の開設
- ・ 不況対策としての労働者紹介所開設
- ・ 児童虐待防止運動
- ・ 貧しい人でも診療を受けられる救世軍病院の開設
- ・ 米騒動や関東大震災での救済活動

などがある。

山室軍平のこのような活動は、子どもの頃からの「善いことをしたい」「人々の役に立つことがしたい」という思いからであり、生涯の思いでもあった。軍平の意志を受け継ぐ「哲多町ボランティア館」が本郷小学校の横に建てられている。

(2) 救世軍

キリスト教プロテスタントの一派。1865年、ウィリアム＝ブースによって、イギリスのロンドンに創設された。東ロンドン伝道会に始まり、1878年以後「救世軍」と称し軍隊組織により伝道、教育、社会事業などを行い世界的に発展した。1895（明治28）年日本に渡来した。山室軍平は、日本人として最初の救世士官となった。今日の救世軍の働き（伝道や社会奉仕活動）は、軍平に負うところが大きく、救世軍の最高の荣誉である「創立者章」を受けている。

(3) 慈善鍋

1806（明治39）年の年の瀬、貧しさで餅を買えない人々に軍平は餅を配る「慰問籠」の運動を始めた。これが、歳末救助運動の初めとなり後には恒例となった。やがて街頭に鍋をつるして通行人から寄付を募る「慈善鍋」と呼ばれるものとなった。

その後、名称が「社会鍋」と変わった。

現在では、救世軍が歳末に生活困窮者のための街頭募金運動として行っている。

〈慈善鍋、社会鍋が詠まれた俳句〉

- ・ 来る人に我は行く人慈善鍋（高浜虚子『五百句』昭和8年）
- ・ かるがるとにげあしのびて社会鍋（飯田蛇笏『山響集』昭和15年）

(4) 『平民の福音』

軍平は、1899（明治32）年夏、機恵子との結婚後間もなく救世軍から2週間の休暇をもらい横浜市外に小さい部屋を借り受けて休養した。その間、早朝から起きて、機恵子とともに『平民の福音』を書き上げた。軍平は、入信当時から日本の一般民衆が読んでよくわかるようなキリスト教入門書を著したいと念願し、かねてから資料を集めていたものをまとめた。内容は、天の父上、人の罪悪、キリストの救い、信仰の生涯、職分の道の5章に分かれている。多くの聖句、例話、詩歌などを引用し平易な言文一致体で書かれている。

(5) 参考文献等

- ・ 『山室軍平』 高道 基 （日本基督教団出版局）
- ・ 『山室軍平：人道の戦士』 山室武甫 （玉川大学出版部）
- ・ 『山室軍平やさしさを生きる』 佐藤卓志 脚本
タケバヤシ哲郎 画（哲多町）
- ・ 『山室軍平選集』全十巻（山室武甫、山室軍平選集刊行會）
- ・ 『郷土にかがやく人々Ⅱ』（日本文教出版社）
- ・ おかやま人物往来 山室軍平

<http://degioka.libnet.pref.okayama.jp/mmhp/kyodo/person/yamamurogunpei/gunpei-short.htm>